

概 要 報 告

実施期日	令和7年8月1日(金)
部 会 名	小学校 総則部会

研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善と充実

テーマ

『生きる力を育む異学年交流をふくんだ教育活動の展開』

提案概要

学校教育目標である「のばす・つなぐ・ささえあう」の実現に向け、カリキュラム・マネジメントの充実と学習の基盤となる資質・能力の向上を主に、学校行事の充実や各学年間での効果的な交流の場面を設定し、実践に取り組んだ内容の成果と課題から提案をした。

提案校の児童実態として、学年間を越えて家族のような関わり合いがもてるアットホームな雰囲気がある一方で、関わりが深いがために、悲痛な言葉で相手を悲しませてしまうこともある。そのため学校として「異学年交流の可能性」を信じ、全校・学年間等で様々な実践を行うこととした。

実践1の「なかよしのわ」とよばれる全校行事では、縦割りの小グループを形成し、交流あそびや制作活動などを通して仲を深めた。活動目的として、より望ましい集団活動の促進と児童の心身の調和の取れた発達・個性の伸長を図ることとし、年間で全7回活動した。各回の企画も特定の代表児童のみが行うのではなく、4～6年生の児童が中心となって持ち回りで企画・運営をした。高学年は低学年児童にも内容が伝わるよう丁寧に言葉を選定したり、相手に合わせて進行したりと思いやりの心が育まれる活動となった。

実践2の異学年交流を目的とした「修学旅行のまとめ・発表」では、次年度修学旅行に行く5年生に向けて、6年生がチームで分担した活動内容をまとめ、発表するという取組を行った。発表を聞いた5年生からは「来年の修学旅行がより楽しみになった。」と嬉しい声も聞かれ、6年生の「やってよかった。」という、充実した取組に満足感が浮かんだ表情が印象的な活動となった。

実践3の「物語を介した1年生との交流活動」では、6年生の国語科と図画工作科を教科横断し、1年生に向けた童話を中心とした物語の発表を行った。1年生がより楽しめるように、工夫や改善点をよく話し合い、劇や紙芝居・ペープサートといった多様な表現方法で各自が相手を意識した制作活動を行い、互いの楽しそうな表情から交流の深まりが感じられた。

上記のような実践を通じて、日頃の教室内での活動だけでは中々活躍できない児童の、生き生きとした姿が見られたり、異学年と交流することで目的や目標を明確にして取り組むことができたりと、充実した活動となった。だが、それと同時に行事のマナー化も課題として挙げられる。「なかよしのわ」は毎年、継続して行われる活動だからこそ、低学年の児童も経験から「自分たちが高学年になったらあのようなことをするのだ。」などと、どの児童も安心して参加でき挑戦しようとする姿勢が見られる一方、活動に対して新鮮味や緊張感が薄れ、新たな工夫が見えにくくなっていることも否めない。こうした異学年交流は、学校教育目標の「つなぐちから」につながる実践となり、自由度も高く、児童の満足度が得られることは実践からも見取ることができるが、そこに学びの深まりがあったかは今後、検証が必要だと感じる。

また、自由度が高いからこそ自律や協調が難しい児童もいる。児童一人ひとりの個性や実態に応じて、どういった支援が有効的なのかを予め考え、個に応じた手立てを用意していく必要性もあると感じている。

協議の柱及び協議概要

◎協議の柱

「各学校における異学年交流の具体的実践例とその指導効果について(保幼小・小中連携を含む)」

○協議概要

小中連携の観点からも、湘南三浦地区の小中学校の先生が混ざるよう、事前に座席指定を行い協議に入ってもらった。地区や校種をまたいだことで、多様な取り組みが交流されたり、各校の目指す教育観や実践を伝え合ったりと、充実した協議の時間となった。

1つ目の協議報告では、中学校・小学校での校種や児童・生徒数の違い（大規模校や小規模校での違い）からも、実践される異学年交流にも大きな違いが現れることについて取り上げられた。比較的、小規模校は取組がしやすく、行事のみでなく日常の昼休みに集まってゲームを行ったり、異学年で掃除をしたりして、日頃から交流を深めることもできる。大規模校の場合は、年間で数回の集まりやフェスティバル等の行事など、決められた時間での異学年交流を行うことが多いことが挙げられた。学校の規模によってその取組のしやすさは異なり、「縦割り班がそもそもないという学校もあり、驚いた。」という報告もあった。また、中学校では部活動や委員会があり、十分に異学年交流の働きをもっていることがあり、日常的な関わりはむしろ「他の学年のフロアには行ってはいけない。」という現状もあり、今日の提案・協議を通じて、「縦割りでの関わり大切さを再認識できた。」との声も聞かれた。

2つ目の協議報告では、小中学校をまたいだ異学年交流の実践が聞かれた。例えば、技術・家庭で小学1年生と中学3年生が交流したり、中学校の音楽会を小学生が見学に行くなど、学校・校種をまたいだ関わりも聞かれた。だが、企画だけではその時はよくとも、本当の意味では仲は深まらないことが懸念点として挙げられることがあるため、日常的な関わりを重ねていかないといけない、と改めて異学年交流を行っていくことの大切さを認識した。コロナ以降、学校フェスティバルなどの復活は難しさがあるが、教育効果としてとても大きいことを再認識できたので、今後どのようにしたら、そうした活動ができるのか検討していきたい。

3つ目の協議報告では、異学年交流などの時間はどうしても特活または行事に時間数が充てられてしまい、充実した活動を継続的に行うことは難しさがある。そのため、教科を通じた交流ができないか、例えば、国語科の読み聞かせ等で交流すること以外なども考えていきたいとあった。

4つ目の協議報告では、実状として縦割りグループの構成を組むのも一苦労あることが取り上げられた。ある学校では、入学時から6年間変わらないグループ構成を取っている学校もあり、6年間変わらないからこそその仲の深まりを感じるといった声も聞かれた。教育過程上には「たてわり班」という記載がないため、どのように、どの時間で異学年交流の充実が図れるかを今一度考えていきたい、と前向きな声が聞かれた。

まとめ概要

提案として、参加されている教職員に向け最も伝えたいことは、「異学年交流の可能性」であり、司馬遼太郎は、郷中教育で育った偉人たちに向け「薩長同盟から明治維新までを小さな町でやったようなものである。」という言葉を残しており、「郷中教育は現代の異学年交流と近く、その可能性を信じていきたい」という冒頭より提案を始めた。

学校教育目標「のばす・つなぐ・ささえあう」を実現するための「異学年交流」という方法は有効性を発揮してくれている。一方で特活・行事等の時数の制限や活動内容の精選は課題として残るため、今後も検討していきたい。

具体的な活動を通じて、学年を越えた交流ができていることがとてもよく、教室内ではなかなか活発な活躍ができない児童が、異学年交流のなかで担任も思いがけない一面が見られること、生き生きと活動している姿が見られることにこそ価値がある。学校行事が形骸化されてきている懸念点にも、目的意識をもって、児童が安心して挑戦できる取組を目指していきたい。